

17世紀後半のイングランドにおける
実験的自然学の成立と近代的認識論の形成

(研究課題番号 07801002)

1997年度科学研究費補助金（基盤研究C）

研究成果報告書

1998年3月

研究代表者 田村 均

(名古屋大学文学部教授)

名古屋大学図書	
和B	91475

まえがき

本報告書は、1995年度から1997年度にかけての文部省科学研究費補助金による研究成果の報告書である。この期間中に、私（田村 均）が、当該補助金の研究主題「17世紀後半のイングランドにおける実験的自然学の成立と近代的認識論の形成」に関わって公表した論文を、発表順に収録してある。ただし、第6番目の英文論文は、第5論文に先だって発表されたものだが、主題のつながりを考慮して末尾に置いた。

それぞれの論文は、共通の関心にもとづいているが、重点の置きどころは異なっている。関心の在処をはっきり示すために、別途、書き下ろしの論考を用意したが、諸般の事情により完成稿を得るにはいたらなかった。以下、簡単に、私の関心の在処とからめて各論文の趣意を述べておく。

ジョン・ロックに代表される17世紀後半のイングランドの知識の哲学は、我々が漠然と哲学的認識論として思い描いているものとは根本的に違う発想の上に築かれているのではないか、という見通しが、本研究報告全体の基盤である。すなわち、デカルトとカントを祖型として従来の哲学史家が作り出した「心の内なる表象はいかにして心の外なる対象に的中しうるか」という問題設定は、17世紀の後半に実験的自然学の成立とともに生み出された経験主義の認識論的考察とは無関係であろう、ということである。第1論文と第4論文において、この見通しが最も直截に論じられている。

第2論文は、理性主義的ア・プリオリズムとは根本的に異なるものとしての経験主義の立場が、現実にはどのような知識の哲学としてあったのか、ということを経史的に明らかにしている。第3論文は、現代の認識分析と近代初期の経験主義の発想とを比較対照し、近代初期の古拙な議論にかえて現代の視点からも学ぶべきところがあることを述べている。

第5論文は、イギリス経験論が、デカルト哲学の枠組みに寄り添いながら、根底において異なる発想を持つことを論じる。第6論文は、ヒュームの自我論を、現代の社会人類学の見解と重ねあわせ、〈実体としての自我〉という近代主義の基盤を初めて解体してみせた議論としてそれを捉えなおす。この捉え方は、第5論文の終わりの言葉にそのままつながっている。

目次

1	ジョン・ロックの自然科学の哲学……	1
2	経験的知識の成立……	10
3	感覚する個人……	29
4	哲学的認識論はいつから科学オンチ になったのか？ ……	47
5	デカルトとイギリス経験論 ……	55
6	<i>The Modern Concept of Man and Hume on Personal Identity</i> ……	64
	文献表……	74
	初出一覧……	78

ジョン・ロックの自然科学の哲学^{注1}

1 はじめに

本論文の目標は、『人間知性論』におけるジョン・ロックの自然科学の知識に関する基本的立場を明らかにすることである。そのための手がかりとして、ロックは、哲学的装置としての観念説 (the theory of ideas) をどのように用いているのか、という問題を取り上げる。以下では、第2節で、この問題を解釈枠組みの転換という形で明確化し、第3節で、この転換をロックの議論に即して正当化する。第4節と第5節では、17世紀後半イングランドの知識論の文脈から、我々の主張する解釈枠組みが歴史的に妥当なものであることを示す。さらに、第6節で、一見ロックの議論の混乱に見えるものが、実は、解釈者が暗黙裡に持ち込んだ解釈上の先入見に由来しており、ロック本人に混乱は無いことを示す。最終節では、ロックの基本的立場が確認され、我々の解釈の意義が明らかになる。

2 解釈枠組みの転換

ロックは、心の作用の直接的対象は観念である、とする観念説の考え方を、哲学的分析の方法として採用した。そして同時に、感覚に与えられる単純な諸観念は、個々の事物の实在性を示している、という感覚主義的な实在論の立場もとった。だが、心的内在である感覚の単純観念が、外なる实在を表示する、という主張は、哲学史的常識に従えば、そう簡単には成り立たないように思われる。例えばトーマス・リードは、ロックを論じて「観念の教説は、外なる物的世界の实在を証明することを、必要にすると同時に困難にもする (Reid [1969] p.154)」と述べた。現代ではジョナサン・ベネットが典型的にこの見方を踏襲し、「ロックは客観的世界を、つまり『实在の物』の世界を、我々の到達できない知覚のヴェイルの向こう側に押しやる (Bennett [1971] p.69)」と述べている。

リードやベネットは、明らかに、心の内なる表象からどのようにして外なる实在へ到達できるのか、という問題を、ロックの中に読み込んでいる^{注2}。ところが、後述のように、ロックにとっては、心の内と外ではなく、むしろ、個別的事実認識と普遍的で理論的な認識との関係が問題だった。ロックは、観念説を、〈心の内から外へ〉の難問を考察するためではなく、〈個別的事実から理論へ〉の難問を考察するために用いている。ロック解釈の枠組みは、ロック自身の意図に即して、〈心の内から外へ〉という問題図式から、〈個別的事実から理論へ〉とい

^{注1} 本論文では、近代以降の自然研究全体を意味するときは、「自然科学」と言い、ロックの時代の自然研究を意味するときは、「自然学」と言うことにする。

^{注2} 筆者の知るかぎり、リードとベネット以外のほとんどの解釈者も同じ読み込みをしている。この読み込みをするかぎり、ロックは混乱した哲学者に見えてしまう。

う問題図式へ転換さるべきである。以下では、まず、『人間知性論』から実例を取り、リード-ベネット型の解釈枠組みが不適切であり、我々の提起する解釈枠組みが適切であることを示そう。

3 ロックの問題 ——『人間知性論』2-23-29 と 2-4-6 ——

引用1 「結論すると、感覚は不可入の延長した実体が存在することを確信させる。内省は、思考する実体が存在することを確信させる。経験はそういう存在者の実在を保証している。……経験は、この両方の実体の明晰な観念を、いついかなる時でも、我々に供給している。しかし、これら固有の源泉から受け取られる観念を越えては、我々の機能はとどかない。我々がこれらの実体の本性、原因、様態 (Nature, Causes, and Manner) をさらに探求しようとしても、延長の本性を思考の本性より明晰に知覚できるわけではない。……ここからして、感覚と内省を通じて受け取られる単純観念が我々の思考の限界をなしているということは確からしいと私には思われる。この限界を越えては、心は、どんなに努力しようと、一歩たりとも進むことはできない。これらの観念の本性や隠れた原因 (hidden Causes) を探ろうとしても心は何の発見もできないのである。(2-23-29, 312) ^{註3}」

この箇所は、リード-ベネット型の解釈によると、次のように読まれる可能性がある。

——心的内在である単純観念を越えては、心は一歩も進むことができないのだから、私たちは心の外にある実在には決して到達できない、とロックは言っていることになる。それなのに、冒頭では、経験を通じて物体や精神の実在性が保証される、とも言っている。ロックの議論はひどく混乱している。

しかし、引用1と同じ主張を具体的に展開している次の引用2の箇所と突き合わせてみると、リード-ベネット型の解釈の不適切なことが分かる。

引用2 「誰かがこの固体性 (solidity) とは何かと問うなら、私はその人に自分の感覚から教えてもらうように勧める。火打ち石とかフットボールとかをその人の両手の間に持たせて、自分の両手を合わせるようにさせてみよう。そうすれば、その人は理解するだろう。……我々の持っている単純観念は、経験が我々に〔思考や固体性や延長について〕教えるものである。かりに、経験を越えて、言葉によって、単純観念をよりいっそう明晰にしようと努力しても、我々は盲人の心の中の闇を語ることで晴らし、光と色の観念を説得してもたせるのと同じような失敗に終わるのである。(2-4-6, 126-7)」

^{註3} Locke [1975]の引用箇所は(巻-章-節, 頁/行)と表示する。行番号は長い引用では省いた。訳文は基本的に拙訳だが、岩波文庫の大槻春彦訳を参照させていただいた。

この引用 2 は、単純観念が我々の認識機能の限界だ、という引用 1 の主張の具体的な例示として読むことができる。フットボールを両手の間に挟んで、ぐっと押してみる。すると、我々は、フットボールが手のひらの動きに抵抗するのを感じる。ロックの言いたいことは、この〈抵抗の感じ〉こそ、我々が固体性について明晰に把握できる極限だ、ということである。単純な所与としての〈感じ〉を〈越えて〉、言葉でもってさらに固体性をより明晰に捉えようとしてもうまく行かない。引用 2 は、そう言っているのである。

もとより、いかに〈抵抗の感じ〉を明晰に経験しようとも、この〈感じ〉が物的実体の本性から因果的に帰結してくる様態を、我々の感覚機能が、教えてはくれないことは明らかである。「実体の本性、原因、様態をさらに探求しようとしても（引用 1）」そこまでは我々の機能はとどかない。ところが他方、「言葉によって、単純観念をよりいっそう明晰にしよう（引用 2）」とし、「実体の本性、原因、様態（引用 1）」について言葉を縷々つらねても、感覚の〈感じ〉の明晰さを越えられないし（引用 2 参照）、何の発見も得られない（引用 1 参照）のである。

こう突き合わせてみれば、引用 1 が少しも混乱を含まないことが分かる。個別的事実の感覚的経験を〈越えて〉、事実の因果的把握にただちに達するようには、人間の認識機能はできていない。そういう意味で、単純観念が我々の思考の限界なのである。感覚は、十分確信できる程度に、事物の实在を教えている。だが、事実の因果的説明は、何らかの理論体系のもとでしか成立しない。それゆえ、認識論上の困難は、事実から理論へ到る途上にある。心の内から外へ越え出る途中にあるのではない。ロックの図式は、原則として、〈心の内から外へ〉ではなく〈個別的事実から理論へ〉なのである。

以下では、さらに、自然の事実を言葉で説明するということが、17世紀後半のイングランドで持っていた含意を検討し、歴史的文脈を補って以上の解釈を補強する。

4 ロックと実験的自然学（1） ——言葉と事実——

17世紀後半のイングランドは、近代の実験的自然科学が形成される重要な舞台だった。ロンドン王立協会は実験的自然学者の学会であり、ロックもそのメンバーだった。この協会の一種の公式声明として、1667年に刊行されたトーマス・スプラットの『ロンドン王立協会の歴史』の一節を見てみよう。

引用 3 「ロンドン王立協会の人々は、荘厳な法典や華やかな式典によってではなく、堅実な実践と諸々の実例によって、学問（philosophy）における諸改革をしっかりと打ち立てることに取りかかった。華麗できらびやかな言葉（words）によってではなく、事実の産出という、反論不可能で効果的な沈黙の論証によってそれを行なってきたのである。（Sprat

[1959] p.62) 」

ベーコン以来、実験的自然学の信奉者たちは、スコラ的な問答や言葉の定義による自然の研究が有害無益であると信じ、本当に自然を知り、それを有効に支配するためには、実験や観察に従事して、眼や手を使って勤勉に働かなければならない、と考えた。ロンドン王立協会の自己理解では、自分たちのやってきたことは、言葉をもてあそぶことから学問を解放し、事実と実例の産出という堅実な実践と結びつけることであった。これが当時の実験的自然学者たちの共通理解である。

引用4 「実験哲学は、人々を実地の仕事 (works) に向かわせるという点で、彼らが思考を問答に空費するのを妨げると考えてよい。 (Sprat [1959] p.341) 」

実験哲学の立場から見れば、言葉に拘泥することは時間の空費にすぎず、言葉がもたらす対立や困難は、実地の作業を通じて解消できる。言葉ではなく実地作業を、という態度は、17世紀イングランドの作家にひろく見られる (Jones [1982], Formigari [1988] 参照)。ロック自身も、『人間知性論』第3巻の言語論では、事物の本質を言葉で定義することによって自然学が成り立つとみなすスコラ学派の態度を、厳しく批判した。

この文脈に置けば、言葉で単純観念を説明することはできない、という先のロックからの引用2の主張は、次のような趣旨になる。手のひらにフットボールからの抵抗を感じるという経験は、ボールを押してみるという小さな〈実験〉の結果である。ボールを押すという〈仕事〉は、抵抗の感じを得て終了する。この〈仕事〉の結果として得られた〈抵抗の感じ〉という単純観念を、何らかの〈言葉〉がより明晰にする、ということはあるまい。要するに、これはスコラ的自然学に対抗する実験的自然学の主張なのである。

「観念」というロックの術語を、同時代の自然学方法論の文脈に置いて解釈すれば、リード・ベネット型解釈の暗黙の前提、〈観念は心的内在だから外的対象からは原理的に切り離されている〉という哲学史的通念が、まったく当てはまらないことがはっきりする。以下では、さらに、先の引用1の「実体の本性、原因、様態」といった言葉の含意を、歴史的な文脈の中で明らかにしよう。

5 ロックと実験的自然学 (2) ——事実と因果——

ロックの臨床医学上の師、トーマス・シドナムは、次のように述べている。

引用5 「高慢にも、人は、……事物の隠れた原因 (the hidden cause) をどうしても見破りた

いと思い、自然の働きについて我流の原理を置き、公準を打ち立てるのが常であった。そして、自然が、というよりも本当は神自身が、人の作った公準の命ずる法則に従って進んでいくと期待して、結局、全く得るところはなかったのである。('De Arte Medica', Dewhurst [1966] p.81-2) 」

これは、今までの学問が、地道な進歩を遂げてこなかった理由を、指摘している箇所である。「隠れた原因」という言葉は、ロックからの引用 1 の末尾にも見えている。「隠れた原因」を追求することは、結局、勝手な原理で自然を推断しては思弁と論争にふけり、一步も学問を進ませることのなかった旧来のスコラ学派のやり方である。シドナムの考えでは、そもそも世界の実在的構造の完全な因果的把握は、神自身にしかできない。

引用 6 「人の狭く弱い能力は、目に見える外的な原因が産み出す諸結果の観察と記憶以上には届かないであろう。……この世界の巨大で興味深い構造、つまり全能なる存在の行なった仕事は、これを創った知性以外によっては完全な理解はできない…… ('De Arte Medica', Dewhurst [1966] p.82) 」

これを解剖術という具体的な問題に即して述べると、次のようになる。

引用 7 「確かに、我々は、胆汁と尿とがそれぞれ肝臓と腎臓から出てくるということを見るし、胆汁と尿が肝臓と腎臓の作るものであることも知る。だが、そのことによって、そういった臓器の働きの原因 (cause) や様態 (manner) に一步でも近づいたわけではないのである。 ('Anatomic', Dewhurst [1966] p.87) 」

解剖学者は、体液を臓器が作っているという観察可能な事実には到達できず、臓器の働きの原因や様態は見えはしない。これは、物体と精神の働きの事実を、経験を通じて知ったとしても、それらの働きの原因や様態に近づくわけではない、という引用 1 におけるロックの言葉と同じ考え方である^{註4}。

このように、17世紀の実験的自然学者にとって、実在の本性や原因や様態への言及は、観察可能な範囲を越えてしまえば、空虚な思弁や論争にかまけることとほぼ同義であった。ロックも、スコラの実体形相論はもとより、自分の受容した理論である微粒子説 (the corpuscular hypothesis) ですら、個別的事実の観察を越えて、絶対確実な知識を与えるとは考えなかった (4-3-25, 4-12-10, また、第3巻の随所、参照)。

それゆえ、我々が越えられないのは、個別的事実の観察と普遍的で理論的な認識との間を隔

^{註4} これらのシドナムの論文草稿は、ロックが親しく教えを受けた1667～72の期間に書かれた (Dewhurst [1966] p.34) 。そして『人間知性論』草稿A Bも1671年に書かれている。

てる境界なのであって、心の内と外を隔てる境界ではない。ロックは〈個別的事実から理論へ〉の図式を念頭に置いて自然認識の問題を考察している。近世西洋認識論の通念である〈心の内から外へ〉の図式をロックに読み込むことは的外れなのである。

しかし、以上のような解釈枠組みの転換が歴史的に見て妥当だとしても、感覚の単純観念の実在性という主張そのものが成り立ち難いという懐疑論の疑念は、容易に払拭されないだろう。次節では、この疑念が、〈心の内から外へ〉という通念的図式に我々が深く影響を受けていることに根ざしており、ロックの思考とは無関係であることを示す。

6 観念説と感覚主義的实在論

私見では、観念説の最も基本的な主張は次の二つである。

- (イ) 【観念の直接性】 心の作用の直接的対象は観念、すなわち心的内在である
- (ロ) 【観念の表現性】 ある観念は真実在を表現している

この二つに、さらに、どの観念が真実在を表現しているのかを定める原理を付け加えれば、認識と存在の交わる点が定まる。そこで、ロックにならって、

- (x) 【感覚主義的实在論】 感覚の単純観念は真実在を表現している

という原理を付け加えてみる。まず確認すべきことは、感覚主義的实在論 (x) が、観念の直接性 (イ) と矛盾するわけではない、ということである。(イ) (ロ) (x) を続けて読んでみれば、そのことは明白である。(イ) 心は観念のみを直接的対象とし、(ロ) 観念のうちのあるものは真実在を表現しているのだが、(x) 感覚の単純観念がそういう観念である、というだけのことである。

ロックが論点先取をしているような感じがするならば、その理由は、我々が、

- (y) 【観念説の方法論的制約】 観念のみに着目して、真実在を表現している観念を選び出せ

という方針を、暗黙のうちに、観念の直接性 (イ) と同時に受け入れるからである。(イ) の系として観念説の方法論的制約 (y) を受け入れることは、正当化できる。(y) の後半の〈真実在を表現している観念を選び出す〉という仕事も心の作用だから、この仕事は当然観念のみを直接的対象とするのでなければならないのである。

そこで、ロックは感覚主義的实在論（x）と観念説の方法論的制約（y）のすりあわせをどうやったのか、という問題が残る。この問題は、要するに、感覚の単純観念を注視することだけから、感覚の単純観念の信頼性を確立できるか、ということである。

ロックは、まったく簡単に、想起や想像や夢の観念と感覚の単純観念との信頼性の相違は自明である、と考えた。

引用8 「誰も自分が見たり触ったりするものの存在を絶対確実としないほど、まじめに懐疑的であることはできないと私は思う（4-11-3, 631/20ff.）」

実験的自然学者にとっては、ことはこれでおしまいだった。だが、いわゆる〈感覚への懐疑〉をこういう立言で一掃することはできない。そこで、ロックは全く別のタイプの議論を提出する。そもそも、人間の認識機能は、事物について、あらゆる疑いを免れた包括的知識を得るためにあるのではなく、人間の自己保存と生存の役に立つためにある。感覚に対する全面的な懐疑は、我々の生存の役に立たないから、それは実践的に不適切なのだ、とロックは考えた（4-11-8 参照）。たとえば、蝋燭の炎に指を突っ込んで激しい痛みを感じたとき、その炎の実在性を疑ってかかるのは、生きる上で不適切な態度である。

引用9 「〔感覚の証拠は〕快苦、すなわち幸福と不幸と同じだけ我々にとって確実なのだから、我々の望みうる限りの大きさなのである。幸福と不幸を越えては、我々は、それを知るなり、それになるなりしたいような関心事を、少しも持っていない。（4-11-8, 35/6ff.）」

感覚の信頼性を実践に即して述べるこの論法は、初期草稿以来のものだが（Locke [1990] p.21, p.147参照）、観念説の方法論的制約に沿って立てられてはいない。だから、この世での我々の生の全体を考察する際に、ロックは、観念説の方法論的制約を優先するのか、感覚主義的实在論を優先するのか、という哲学的原理の選択を迫られてもよかったはずだ、とは指摘できよう。おそらくロックは躊躇せずに、感覚主義的实在論を優先する、と答えたであろう。ロックは、宗教的・倫理的な原理によって、感覚主義的な实在論の主張が、観念説の方法論的制約よりも《強い》主張として、天降りの導入できる、と見なしていた。ロックの哲学体系はそのようにできている。

引用10 「私たちと、私たちの周囲のすべての事物の無限に賢明な考案者は、私たちの諸感覚、諸機能、諸器官を、生活の便宜と、この世での私たちの為すべき仕事とのために、うまく適合するようにした。私たちは、感覚によって、事物を知り、識別することができる。そして、事物をよく調べてそれらを目的に応じて使い、私たちの生活の差し迫ったい

ろいろな必要事に当てることができる。私たちは、十分鋭い洞察力を持っており、事物の賛嘆すべき仕組みや、その素晴らしい効果を見抜き、創造主の知恵と力と善性を賛美することができる。こういった知識こそ、私たちの現在の条件によく適っており、私たちは、こういう知識に達するための機能を欠いてはいないのである。(2-23-12, 302/10ff.)」

観念説の方法論的制約をとことん守らねばならぬ、という考え方は、〈心の内から外へ〉の図式で認識論的問題を考えるべきだ、という信念に等しい。そのような信念を持つことは特に禁止されはしないが、ロックとは違うやり方になる。ロック本人は〈個別的事実から理論へ〉という図式をとった。この態度は、感覚主義的实在論が観念説の方法論的制約よりも優先する、と認めることに等しい。すでに確認したように、この態度は矛盾をもたらすわけではない。したがって、ロックの考え方に内部的な不整合はない。そこに不整合を見てしまうのは、解釈者が〈心の内から外へ〉という図式を暗黙のうちにロックに押しつけているからなのである。

7 むすび

ロックの自然科学の哲学は、実験と観察から出発し、人間にとって有用な諸々の知識を獲得しよう、という同時代のベーコン主義の学問の理念に沿うものである。デカルトに由来する観念説は、この理念に従属し、これを展開するための装置であった。解釈枠組みの転換を通じて、我々は、ロックのこの立場の整合性を明らかにできたと考える。

最後に、この枠組みの転換から得られる洞察を三つ挙げておこう。

第一に、感覚主義的实在論にもとづく観念説は、個別的事実認識の、理論からの独立を成立させる。一般に、観念は、心の中の直接的対象として、概念的演繹の手間なしに直知できるとされる。そこで、感覚の単純観念も、およそ概念枠とは独立に同定できることになり、こうして、理論体系とは切り離して実在的で自明な事実認識が得られることになる。観念説がベーコン主義的科学の基礎づけに寄与するのは、この特性を通してである。

第二に、ロックと懐疑論との関係が明かになる。〈個別的事実から理論へ〉という図式上では〈帰納への懐疑(理論の不完全決定性)〉が問題となる。また、感覚的受容の信頼性は、感覚は疑わしいという〈感覚への懐疑〉のような大ざっぱな形ではなく、〈データを採取する技術や装置が十分信頼できるか〉という精密で真に科学的な形で問われる。ロックは、理論体系としての自然学は蓋然的水準にとどまると見て〈帰納への懐疑〉を受け入れたが、〈感覚への懐疑〉は問題外と見なし、自然探究の技術的な洗練を重視した。

第三に、微粒子説という理論体系へのロックのコミットメントを適切に解釈できる。近年のロック解釈では、このコミットメントを、ロック本人の留保に反して強く読み込み、ロックを

今様の科学的実在論者になぞらえる傾向が見られる^{註5}。だが、我々の解釈では、ロックの実在論は、感覚の水準で十分整合的に主張され得るから、微粒子説への形而上学的コミットメントを、ロックに無理強いする必要はなくなるのである。

^{註5} この傾向は Mandelbaum [1964] が導入した。なお、Mandelbaum [1964] は、ロックとベーコン主義との結びつきに十分留意し、その点で均衡のとれた解釈を与えている。

哲学的認識論はいつから科学オンチになったのか？

1 問題提起

哲学的認識論は、17世紀の終わり以来、実験という手続きに基づく知識主張としての近代的自然科学を捉えることに失敗し続けて、現在に至っている。この失敗の最初の徴候は、ジョン・ロックの『人間知性論（1690）』に対する同時代人スティリングフリート（Edward Stillingfleet 1635-1699）の誤読に見出される。その徴候の本質は、ロックの哲学的主張をデカルト哲学をなぞるかたちで捉えようとする現象である。以下では、実験的自然学の形成期に、実験という知識生産の手法に関してどのような擁護の主張が行われ、それがすぐさまどのように誤解されたのかを検討する。この誤解は、私の見るところでは、現代の科学の哲学にも無縁ではない。

ロックの『人間知性論』は、17世紀後半のイングランドのベーコン主義的な実験的自然学者の活動を支持し、彼らが生産する知識主張を擁護する哲学的試みであった。この試みのために、ロックは、「観念（idea）」というデカルトの用語を全面的に用いた。この結果、ロックの哲学的主張を、デカルト哲学と混同する現象が不可避免的に生じた。こうして数学的自然学の基礎づけを主目的とするデカルト哲学の問題設定が、ロックの主張にも当然のように読み込まれることになり、実験的自然学の知識主張の擁護というロックの試みの意図、および、そのために提出された哲学的議論の主旨が、ともに見失われてしまった。

ロックの議論をデカルトの問題設定と重ね描きするこの不幸な思想史的現象は、上述のようにロックの同時代にすぐ出現した。そして、現代のロック解釈者の叙述にも、18世紀末のトーマス・リードのロック批判にも（Reid 1785, Essay II, Chap. IX）、あるいは、ヴィンデルバントやコプルストンのような標準的な哲学史教科書にも広く受け継がれている（Windelband 1957, 401-402, Copleston 1963, 89-90, 114-116）。

2 感覚への懷疑とロック

デカルトとロックの大きな相違点は、方法的懷疑の出発点である感覚への懷疑を、ロックがまったく受けつけない、というところに見出される。ロックにとっては、感覚に与えられるもの（感覚の単純観念）は、つねに信頼できる個別的事実情報である。ところが、スティリングフリートはじめ、読者の多くは、ロックの言うところをそのまま額面通りに受け入れることに失敗し続けてきた。

まず、最初に、ロックが感覚への懷疑を受けつけないという事実を確かめておく。ロックは、確かに「心は自分の持つ観念以外の何も知覚しないのに、どうやって、事物そのものに観

念が合致すると知ることができるのだろうか (Locke 1690, 4-4-3)」という問いを立てている。彼は、観念説にはこのような固有の認識論の問題が生じることを理解している。だが、こう問うた後ただちに、単純観念は心が自分で作ったものではないから、「必然的に、自然なやり方で事物が心に作用して作り出した結果でなければならない (4-4-4)」と結論する。単純観念は「我々の外なる事物が自然にかつ規則的に産出したものであるので……そうあるべく〔神によって〕意図されている〔事物との〕合致をすべて保有している (4-4-4)」と言われている。要するにロックは、感覚機能の信頼性を疑ってかかる気がまったくないのである。

3 感覚への懐疑と実験的自然学

感覚が信頼できる認識機能であるということは、ロックだけでなく、同時代の実験的自然学者が広く受け入れている主張だった。たとえばスプラット (Thomas Sprat) の『ロンドン王立協会の歴史 (1667)』には、イエス・キリスト自身が奇跡という神の手による実験 (Devine Experiments of his Godhead) を行い、感覚を通じて人々に働きかけているのだから、感覚を通じて知識を獲得することが悪であるはずはない、といった論法が見られる (352-353, 369参照)。ロックも、感覚も含めて人間の認識機能が神の配慮によってしかるべく整えられているということを確認している (1-1-5, 2-23-12参照)。

この当時のイングランドの知的状況を主導したロバート・ボイルは、自然学にたずさわる人々が「人類に対して為しうる最も大きな貢献の一つは、原理や公理を立てることを急がずに、まじめな態度で勤勉に実験を行ない、観察を蓄積すること (Boyle 1772 vol.1, 302)」であると主張し、ベーコンの自然誌 (natural history) の計画を引き継ぐとも言った (ibid., 306)。

感覚機能を信頼することは、実験や観察を遂行する上での必須の前提である。だから、ベーコン主義的な実験的自然学を推進しようとしていた17世紀後半のイングランドの哲学者や自然学者たちが、デカルトのように感覚への懐疑を学問の出発点と見なしていたと想定するのは、まったく見当はずれなのである。

4 スティリングフリートのロック批判

スティリングフリートは、しかし、デカルトとロックを重ね合わせて理解し (Stillingfleet 1697a, 247-249, 1697b, 86-88, 1698, 66-69)、観念という装置による哲学的分析 (「観念の道 "the way of ideas"」) は懐疑論に到ると批判した (1697a, 243, 1697b, 125)。もともとスティリングフリートの関心は、明晰判明な観念への固執は信仰の神秘の受容を妨げる可能性がある、というあたりにあった (Stillingfleet 1697a, 233, 262ff., 1697b, 23, 38ff., 1698,

177)。だが、感覚への懐疑に関わる純粋に認識論的な議論も見出される。

感覚の明証という論点に関わって、スティリングフリートは「どのようにして我々の内なる観念から、我々の外なる対象の確実な存在を証明することができるのか（1697b, 129）」という問いを立てる。そして、ロックの議論はこれによく答えていないと批判する。

この問いと批判は、西洋近世の認識論の歴史全体の根底にあって通奏低音のように響いている一つの問題意識を表現している。これこそ哲学的認識論の根本問題であるというふうに考える人は、現代でもたくさんいるかもしれない。だが、そのように考えるとき、その人は必ず実験的自然学の重要な特徴を見失うことになる。17世紀後半のイングランドの実験的自然学者は、この問題意識とはまるで無関係だったのである。

ロックは、現実には太陽を見ているときと夜それを思い出しているときとは人は明らかに違う経験をもつものだから、そこには問題は全然生じないと考えていた（4-2-14）。確かに、実験や観察に実際にたずさわる場合、現実の感覚それ自体に明証があるという以上の議論は必要としないであろう。

しかし、スティリングフリートは次のように批判を展開する。「単純観念はそれ自身を越える確実性の根拠を全く提供しない。外的な対象は我々の感官に印象を刻みつける。そこで、単純観念によって我々が得る確実性は、我々の感官が対象によってかくかくしかじかの仕方で刺激されているということだけである。だが、対象の中であって我々の内にそのような結果を産出するものについては、単純観念は我々に知らせないのである。（Stillingleet 1697b, 20）」それならば、「いったいどうして単純観念が我々の知識と確実性の基礎でありえようか。我々に刻みつけられる印象の真の諸原因を、我々は単純観念を通じては少しも見出すことができないのだから。（ibid., 22）」

実は、この批判は、『人間知性論』でロックが展開した認識の理論には全く当てはまらない。その理由は、しかし、ロックがこのような批判を論破しているからではない。事情はもっと逆説的である。この批判がロックに当てはまらないのは、これらのことはロックもまた積極的に主張することだからである。

ロック自身、心は感官や内省の提示する単純観念を一步たりと越え出ないと言っているし（2-1-24）、単純観念という我々の思考の限界を越えて事物の本性や原因を探ろうとしても、心は一步も進めないとも言っている（2-23-29）。さらに、このゆえに感覚経験に基礎を置く自然学は絶対的な確実性には到達できず、蓋然的知識の段階に止まると考えていた（4-3-26、4-12-10）。いったいなぜ二人は対立しなければならなかったのだろうか。スティリングフリートとロックの対立は、我々には分かりにくい何かをめぐって生じている。

5 ロックとスティリングフリートの対立点

この奇妙な状況を解説する鍵は、次のようなロックの言明に見出される。「私〔ロック〕が取り扱わねばならないことの一つは、あたかも私が実体の存在を疑わしいと見ているとでもいうかのような点である。……私は、実体の存在ではなく実体の観念（not the being but the idea of substance）が、基体（substratum）を想定する我々の習慣に基づいていると見なした。……事物の存在は我々の観念に依存してはいないのだから、実体の存在は私の言ったことによってはまったく揺らいだりしないだろう。（Locke 1823 vol.4, 18）」つまり、ロックは、事物が在るということは感覚を通じて全く明らかなが、事物の観念については、その根拠が我々の習慣にしかすぎない場合がある、と見ているわけである。

ロックは、こうしてスティリングフリートにはない区別を設けたことになる。それは、個々の事物の端的な存在と、それが何であるかというその本性の理解（実体の観念）との区別である。感覚の単純観念は事物の存在を端的に告げるが、その本性は告げていない。だから、或る単純観念が端的に与えられるという個別的経験と、その単純観念は事物のしかじかの本性のゆえにかくかくなのだというような因果的説明とは区別されなければならない。単純観念という限界を越えて本性や原因を探ることはできない、という主張はこの区別に注意を促しているのである。

個別的な事実の認識とその事実についての因果的説明との区別は、実験的自然学を推進する上での重要な戦略の一つであった（Shapin & Schaffer 1985, 49ff.）。この区別は、より広い歴史的文脈に置けば、事物を取り扱う具体的な作業 works と事物についての定義や記述や論争 words との区別に対応している。実験的自然学者たちは、眼や手を駆使して得られる実験や観察を高く評価し、定義や論争による自然本性の言語的探求を無価値と見なした（Sprat 1667, Jones 1982、田村1994、1996a）。

この歴史的文脈からすれば、我々の認識は単純観念という限界を越えられないとロックが述べる時、その趣旨は、心の内から外へ越え出られないということではない。そうではなくて、我々の認識は感覚的証拠の確実性を越えられない、ということなのである。どれほど自然本性について言葉を連ねて説明を加えても、端的な経験の明証性を越えるような認識を得ることはできないのである（2-4-6参照）。ロックの場合、観念という哲学的装置を使って切り離されているのは、心の内と外ではなく、事物の端的な存在の認識とその本性の認識である。この分離は、個々の事実認識とその事実の因果的・理論的説明の分離を意味していた。

一般に、観念は心の直接的対象であるから、それが何であるかは推論の介在なしに直知できると見なされる。ロックのように感覚は信頼できると考えるならば、感覚の単純観念は外的対象と合致し、かつ、推論を介さずに——つまり他の知識を前提せずに——直知できることになる。すると、ここに、事物の本性についての推論と無関係に、感覚を通じて個別的事実の確実な知識が得られる、と主張できることになる。この主張は、歴史的に見れば、スコラ学における自然本性の言語的探求は無価値で不必要だ、ということと同じである。観念説は、実験的自

然学の基礎づけに効果的に用いられているといつてよいであろう。

一方スティリングフリートは、理性推理に裏づけられない単なる感覚の単純観念は確実な知識をもたらさないと考えた(1697b, 23)。この二人の対立点は、個々の経験を確立するために、理性的な言説が必要なのかどうか、というところにある。だが、感覚へのデカルト的な懐疑をロックの内に読み込むと、ロックの「観念の道」も心の内と外を切り離す仕掛けにどうしても見えてしまう。すると、事実と理論体系(理性的言説)の分離をめぐるこの対立には気づくことができなくなる。こうして、観念説を通じて感覚経験を擁護し実験的自然学を支持するというロックの哲学的主張の構造は、ひどく見て取りにくいものになってしまうのである。

6 事実とスキル

認識論的には、ここで次のような疑問が生じる。感覚の単純観念が物理的刺激によって作り出される受動的刻印にすぎないとしたら、それは実験的自然学を支える自然過程ではあっても、その知識主張の基盤にはなりそうもない。理論の供給する概念枠組みを排除した単なる受動的刻印は、認識の名に値しないと思われる。すると、スコラ的な偏向はさておいて、理性を重視するスティリングフリートの方に、かえって認識に関する正しい見通しがあったことになりそうである。だが、この認識論的な疑問は、実験的自然学のあり方を見ることによって解消できる。

実験的自然学を推進する人々が重視したのは、多くの場合、理論的普遍性ではなく技術的有用性だった。たとえば、ロックの臨床医学の師、シドナム(Thomas Sydenham 1624-1689)は、「自然の物体の知識という主題についての思弁は、どんなに興味深く洗練されていて見かけが深遠で堅固に思われても、そういう思弁を追い求める者に、何かのより上手なやり方や、より簡潔で容易なやり方を教えないのならば、あるいは、新しい有用な発明を見いだすようにしてくれないなら、そういう思弁は知識の名に値しない("De Arte Medica", Dewhurst 1966, 83)」と断言する。自然の探求の目標が実用上の有効性を目指したものであるのにもなって、実験的自然学者の探求の方法もまた観察や実験の技術的な修練を重視するものとなる。シドナムは、臨床医学においては、多数の症例の観察とそこから得られる診断技術や治療法の改良や洗練が重要であって、ガレノスやヒポクラテスの叙述に基づく理性推理などはおよそものの役に立たないと考えた。

とはいうものの、当時、一般に実験はしばしばうまく行かず、自然学者自身が実験という活動の意義に疑いを抱くこともあった。このような不安に対して、スブラットはこう述べている。「私は、多くの実験が失敗に終わりやすいことを認める。……だが、ここから結論すべきことは何なのか。実験の不安定さや不確定さのせいで我々は実験で苦勞するのをすべてやめるべきだろうか。むしろ、実験の過程をもっと精密にもっと注意深くやるように我々は促される

のではないだろうか。……実験結果がしばしば不確実で我々の予期に反することを認めよう。だが、このことは、もっと抜け目なく正確な探求が是非とも必要なことを教えているだけである。(Sprat 1667, 243-244)」

要請されているのは、自然についての体系的理論ではなく、個々のものを扱う実験遂行の技術(探求のスキル)の改良や洗練である。このような高度なスキルの一つの成果が、たとえば真空ポンプを用いたボイルの数々の実験であった。ボイルは、空虚が存在しうるか否かという理論的な対立には興味を示さず、〈真空〉を〈ポンプによって空気が排除された空間〉というふうな、具体的なスキルを通じて操作的に定義し、数々の実験を試みたのだった(Shapin & Schaffer 1985)。実験的自然学の搖籃期に、世界の分節化を作り出す仕掛けとして重視されたのは、理論的言説ではなくて、探求のスキルである。実験家は、事実の解釈の仕方以前に、事実の作り方に心を砕くものなのである(Gooding 1982, 1989, Nickles 1989)。スプラットは、「子供たちの目や手をいろいろな種類の感覚的事物を見たり触れたりすることに振り向けることは、一般学芸のややこしい教説の学習や暗記より役に立つのではないか(Sprat 1667, 329)」と述べる。知性は具体的経験を通じて発達するというのが実験的自然学者たちの共通の見解だったわけである。

7 単純観念とスキル

ロックの単純観念の説が立脚しているのも、上のような考え方である。ロックは、胎児の頃から始まって成人に到るまで続く感覚機能の発達過程に着目し、もともとは刺激を受容する過程である感覚について、「感覚によって受け取る観念は、成人の場合には、しばしば判断によって変容を加えられており、我々はそれに気づかない(2-9-8)」と述べる。この箇所では判断と言われているのは、視覚刺激の平面的な布置から奥行き知覚を形成する働きのことである。これは意識的で知的な判断ではないし、ましてやどんな意味でも理論体系には依存していない。むしろ、脳を含む身体機能を、感覚経験を通じて発達させていった結果として得られる感覚機能そのもののことである。

しかしロックはまた、「自然において恒常的に不可分に結合されている単純観念が、何と何とであり、幾つあるのか、ということを見つけたすためには、多くの時間と、骨折りと、技術と、厳密な探求と、長い吟味とが必要(3-6-30)」であるとも述べている。これは自然種を確定する作業のことを言っているのだが、このような文脈では、単純観念が獲得される条件として、感覚機能の一般的な発達の上に、実験的自然学者の専門的修練が追加されている。ロックは、このような専門的スキルを通じて獲得される経験内容もまた単純観念と呼ぶのである。

実験室の中で実地訓練を受けてはじめて身に付くような探求のスキルが、感覚の単純観念の獲得を支えている。他方、すでに確認したように、感覚の単純観念は、神の計らいによって外

的对象との合致が保証されている。それならば、実験的自然学者が探求のスキルによって取り出した感覚的事実は、そのまま自然についての断片的だが信頼できる知識であることになるだろう。それゆえ、ロックの感覚の単純観念の説は、

- (1)個別的事実が理論的言説と独立に認識されること、
- (2)個別的事実は探求のスキルを通じて捉えられること、
- (3)この認識の過程全体は神の計らいによって保証されていること、

という三つの主張によって実験的自然学の擁護を試みているわけである。先に述べた認識論的疑問に対しては、理性推理ではなく探求のスキルが自然過程に介入して認識を成立させるのだ、と答えられよう（田村1996b、柴田1996）。

上の(1)の「理論的言説」とは、事実上スコラ的な自然学体系のことである。ロックが観念説を使って経験から分離したのは、経験的事実に基づかず権威のみに基づいて社会的に受容されていた様々な教説であった。たとえば、ロックによれば、諸性質の支えである基体の想定は、感覚の明証を伴わない思考の習慣にすぎない。

この姿勢は、デカルトが、感覚への懐疑を通じて外的世界への感覚的な接近の可能性を切り捨てたのとは全く違っている。ロックは、検証を経ずに受容された信念体系を切り捨てて、個々の人の感覚経験を確実性の高いものとして推奨した。だから、逆に、新たな感覚経験（実験や観察）をもたらすような理論的洞察は、むしろ歓迎される。ボイルもスプラットもロックも、自然探求において理論や仮説が果たす役割をよく認識していたのである（Boyle 1772 vol.1, 303、Sprat 1667, 31, 257f.、Locke 1690, 4-12-13）。

8 哲学的認識論の現在

以上のような思想史的な見通しを持つと、我々は、現代の科学の哲学の中に、依然として或る誤解が生き延びているのを見つけることができる。たとえば、クワインは観察文について次のように言っている。

「観察文を主観的感覚内容に結びつけようとする古くからの傾向は、観察文が科学的仮説を裁く間主観的な法廷でもあることを考えてみれば、むしろ逆説的な成りゆきである。この古くからの傾向は、主観の経験の内にあるより先なる堅固なものの上に科学を築こうという衝動に由来していた。われわれはこの計画を捨てたのだ。（Quine 1969, 87）」

「観察文とは、同じ刺激にさらされているときには、当該の言語のすべての話し手が同じ判定を下すような文である。要点を否定的に言えば、観察文とは、その言語共同体の内部において、過去の経験の相違に影響されない文なのである。（Quine 1969, 86-87）」

こういう文言でクワインが暗黙のうちに想定しているのは、〈認識主観〉と〈客観的自然〉との深い断絶のようである。ところが、我々の思想史的見通しの下では、観察文が結びつく「主観的感觉内容」は、もともと客観的自然過程とは対立していない。そうではなくて、吟味を経ずに受容されている信念体系、言い換えれば「集団的信念内容」に対立しているのである。個々の経験を、吟味を経ずに受容された集団的な信念体系に寄り添わせるな、というのが実験的自然学のスローガンである。

この文脈では、〈主観〉は物質に対する〈精神〉ではなく、社会に対する〈個人〉を指すといった方がよい。感覚する個人の経験内容が観察の実質である。個人が自然の諸事物の間で生きているかぎり、観察が客観的な自然過程と因果的に結びついていることは自明の前提である。ロックが観念説を用いて切り離したのは、〈個人の経験〉と〈集団的信念内容〉なのであって、〈認識主観〉と〈客観的自然〉ではなかった。クワインの指摘する歴史的な逆説は、デカルトとロックを混同した結果、感覚への懐疑につきまといわれる羽目になった哲学的認識論の方に属しているのであって、古くからある実験科学の擁護論の方には属していなかったのである。

また、観察は探求のスキルによって支えられている。だから、「過去の経験の相違に影響されない」どころではない。専門家と素人では観察できることがらそのものが全く違ってしまふ。科学における観察文は、専門家の修練に立脚してのみ産出されうるのである。普通、素人は、ある専門分野の観察文に対して真偽の判定を下すことはおろか、大雑把な趣旨を理解することすら手に余るだろう。

9 むすび

ロックが『人間知性論』で展開した実験と観察の擁護論は、その「観念の道」が誤解されて以来、一貫して正確に理解されてこなかった。個別的事実と理論体系の区別は心の内と外という区別と混同され、個別的事実を支える探求のスキルという問題も、認識を論ずる上で特に注意を引くことなくおわってしまった。この不幸な思想史的出来事によって、哲学者は、実験や観察を認識論的にまともに理解するという課題から遠ざけられてきた。そして、実験的自然科学は、哲学的認識論のこの躓きとは全く無関係に、大きく発展した。これが近代における科学と哲学の関係である。

- 服部裕幸 1990 : 「翻訳の不確定性と理解」 藤田晋吾、丹治信春 編 『言語・科学・人間』 (1990 朝倉書店) 所収
- 浜野研三 1988 : 「クワインの自然主義と哲学」 井上庄七、小林道夫 編 『自然観の展開と形而上学』 (1988 紀伊國屋書店) 所収
- 浜野研三 1992 : 「認識論上の正当化と認識主体」 『科学哲学 25 自然化された認識論』 (1992 早稲田大学出版部) 所収
- ヒューム, D. 1995 : 『人間本性論 第1編 知性について』 木曾好能訳 (法政大学出版局)
- ボイル, R. 1989 : 『形相と質の起源』 赤平清蔵訳 (朝日出版社)
- 森際康友 編 1996 : 『知識という環境』 (名古屋大学出版会)
- ロック, J. 1972-77 : 『人間知性論 (一) ~ (四)』 大槻春彦 訳 (岩波文庫)

(2) 欧語文献

- Aaron, R.I. 1971: *John Locke*, Oxford University Press.
- Austin, J. L. 1962 : *Sense and Sensibilia*, Oxford University Press.
- Bennett, Jonathan, 1971: *Locke, Berkeley, Hume*, Oxford University Press.
- Boas, M. 1952: 'The Establishment of the Mechanical Philosophy' *Osiris* 10, 412-541.
- Boyle, R. 1660: **NE** *New Experiments Physico-Mechanicall, Touching the Spring of the Air*, in Boyle 1772, vol.1.
- Boyle, R. 1661: **CPE** *Certain Physiological Essays*, in Boyle 1772, vol.1.
- Boyle, R. 1663: **UEN** *Some Considerations of the Usefulness of Experimentall Natural Philosophy*, in Boyle 1772, vol.2.
- Boyle, R. 1666: **OFQ** *The Origin of Forms and Qualities*, in Boyle 1772, vol.3.
- Boyle, R. 1675: **MOQ** *Experiments, Notes, etc. about the mechanical origin of Production fo divers particular Qualities*, in Boyle 1772, vol.4.
- Boyle, R. 1686: **NN** *A Free Inquiry into the Vulgarly Received Notion of Nature*, in Boyle 1772, vol.5.
- Boyle, R. 1772 [rpr. by Olms, 1965-66]: *The Works of Honourable Robert Boyle*, edited by Thomas Birch
- Copleston, F. 1963: *A History of Philosophy, Volume V, Hobbes to Hume*, New York: Doubleday.
- Cunningham, A. 1989: 'Thomas Sydenham: epidemics, experiment and the "Good Old Cause"' in French, R. and Wear, A. (eds), *The Medical Revolution of the Seventeenth Century*, Cambridge University Press.
- Dewhurst, Kenneth, 1966: *Dr. Thomas Sydenham (1624-1689): His Life and Original Writings*, University of California Press.
- Dumont, Louis, 1977: *From Mandeville to Marx*, The Univ. of Chicago Press
- Dumont, Louis, 1986: *Essays on Individualism*, The Univ. of Chicago Press
- Formigari, Lia, 1988: *Language and Experience in 17th-Century British Philosophy*, Amsterdam/Philadelphia: Benjamin Pub.

- Goldman, Alvin I., 1967: 'A Causal Theory of Knowing', *The Journal of Philosophy*, vol. LXIV, No.12, June 22, 1967
- Goldman, Alvin I., 1979 'What is Justified Belief?', in Hilary Kornblith (ed.) 1987
- Gooding, D. 1982: 'Empiricism in Practice: Teleology, Economy, and Observation in Faraday's Physics,' *Isis*, 73, 46-67.
- Gooding, D. 1989: "'Magnetic curves" and the magnetic field: experimentation and representation in the history of a theory', in Gooding, et al. (eds)1989, 183-223.
- Gooding, D., Pinch, T., and Schaffer, S., (eds), 1989: *The uses of experiment*, Cambridge Univ. Press.
- Guttenplan, Samuel (ed.), 1975: *Mind & Language*, Oxford Univ. Press.
- Hume, David, 1978 (初版1739): *A Treatise of Human Nature*, text revised and notes by P.H. Nidditch, Oxford Univ. Press.
- Hunter, Michael, 1981: *Science and Society in Restoration England*, Cambridge Univ. Press.
- Hunter, M. 1985: *The Royal Society and its Fellows 1660-1700*, The British Society for the History of Science.
- Jones, R. F. 1982: *Ancients and Moderns*, Dover Publishing [初版1936、第2版1962、Dover版は第2版の再刊] .
- Kargon, R. H. 1966 : *Atomism in England from Harriot to Newton*, Oxford University Press.
- Kim, Jaegwon, 1988 : 'What is "Naturalized Epistemology"', *Philosophical Perspectives*, 2, 1988 (in Michael Williams (ed.), *Scepticism*, (Dartmouth, 1993))
- Kitcher, Philip, 1992: 'The Naturalists Return', *The Philosophical Review*, Vol.101, No.1
- Kornblith, Hilary (ed.), 1987: *Naturalizing Epistemology*, The M.I.T. Press.
- Laudan, L. 1966: 'The Clock Metaphor and Hypothesis: The Impact of Descartes on English Methodological Thought, 1650-1670', *Annals of Science*, vol.22 (後に、Laudan, L. 1982, *Science and Hypothesis*, Reidel に収録)
- Locke, J. 1823: *The Works of John Locke*, (1963年Scientia社より復刻)
- Locke, J. 1690, 1975: *An Essay concerning Human Understanding* , edited by P. H. Nidditch, Oxford University Press.
- Locke, J. 1990: *Drafts for the Essay concerning Human Understanding and Other Philosophical Writings, vol.1* , edited by P. H. Nidditch and G. A. J. Rogers, Oxford University Press.
- McGuire, E. 1972 : 'Boyle's Conception of Nature' *Journal of the History of Ideas* 33, no.4.
- McIntyre, Jane L., 1989: 'Personal Identity and the Passions', *Journal of the History of Philosophy* Vol.XXVII, October 1989, Number 4
- Mackie, J. 1977: *Problems from Locke*, Oxford University Press.
- Mandelbaum, Maurice, 1964: *Philosophy, Science and Sense Perception*, The Johns Hopkins Press.
- Mauss, Marcel 1985 [org. 1938] : 'A category of the human mind: the notion of person; the notion of self' in Michael Carrithers et al. (eds.), *The category of the person*, Cambridge Univ. Press, 1985
- Merton, Robert K., 1938, 1978: *Science, Technology and Society in Seventeenth-Century England*, Vol.IV, Part Two of *Osiris*, 1938, Reprinted in 1978 by Humanities Pres.
- Nickles, Th. 1989: 'Justification and experiment', in Gooding, et al. (eds) 1989, 299-333.

- Osler, M.J. 1970: 'John Locke and the Changing Ideal of Scientific Knowledge', *Journal of the History of Ideas*, vol.31.
- Polanyi, M. 1958 : *Personal Knowledge*, The University of Chicago Press.
- Porter, R. 1987: *Disease, Medicine and Society in England 1550-1860*, Macmillan.
- Putnam, Hilary, 1994: 'Sense, Nonsense, and the Senses: An Inquiry into the Powers of the Human Mind,' *The Journal of Philosophy*, Vol.XCI, No.9, September 1994, 445-518
- Quine, W.v.O., 1953: *From a logical point of View*, Harverd Univ. Press
- Quine, W.v.O., 1960: *Word and Object*, The M.I.T. Press
- Quine, W.v.O., 1969: *Ontological Relativity & other essays*, Columbia Univ. Press
- Quine, W.v.O., **TD** 'Two Dogmas of Empricism' in Quine 1953
- Quine, W.v.O. **EN** 'Epistemology Naturalized', in Quine 1969
- Quine, W.v.O. **NNK** 'The Nature of Natural Knowledge', in Guttenplan (ed.), 1975
- Reid, Th. 1785: *Essays on the Intellectual Powers of Man*, in *the Works of Thomas Reid* (ed. by Hammilton, W., 1863) vol.1, rpt. by Thoemmes Press, 1994.
- Rogers, G.A.J. 1972: 'Descartes and the Method of English Science', *Annals of Science*, vol 29
- Sargent, R-M. 1986: 'Robert Boyle's Baconian Inheritance: A Reply to Laudan's Cartesian Thesis', *Studies in History and Philosophy of Science*, vol.17.
- Sellars, W. 1963 : 'Empiricism and the Philosophy of Mind' in Sellars, W., *Science, Perception and Reality*, Routledge and Kegan Paul.
- Shanahan, T. 1988 : 'God and Nature in the Thought of Robert Boyle', *Journal of the History of Philosophy*, vol. 26, no.4.
- Shapin, S. and Schaffer, S. 1985 : *Leviathan and the Air-Pump*, Princeton University Press.
- Sprat, Th. 1667: *The History of the Royal Society of London*, ed. by Cope, J. I. and Jones, H. W., Washington Univ. Press 1951.
- Stillingfleet, E. 1697a: 'The Objections against the Trinity in Point of Reason answer'd' (Chapter X from: *A Discourse In Vindication of the Doctrine of the Trinity*, London 1697) in Stillingfleet 1987.
- Stillingfleet, E. 1697b: 'The Bishop of Worcester's Answer To Mr. Locke's Letter', in Stillingfleet 1987.
- Stillingfleet, E. 1698: 'The Bishop of Worcester's Answer To Mr. Locke's Second Letter', in Stillingfleet 1987.
- Stillingfleet, E. 1987: *Three Criticisms of Locke*, Georg Olms.
- Thomas, K. 1978 : *Religion and the Decline of Magic*, Penguin Books.
- Windelband, W. 1957: *Lehrbuch der Geschichte der Philosophie*, 15 Aufl., Tübingen (初版 1891)
- Yolton, J. 1975: 'Ideas and Knowledge in Seventeenth-Century Philosophy', *Journal of the History of Philosophy*, vol.13

初出一覧

「ジョン・ロックの自然科学の哲学」『哲学』第47号（日本哲学会編 1996）
pp.207-216

「経験的知識の成立——所与・効用・社会」『知識という環境』（森際康友編
著 名古屋大学出版会 1996） pp.135-159

「感覚する個人——センス・データ論批判と自然主義——」『分析哲学の現
在』（藤本隆志、伊藤邦武編著 世界思想社 1997） pp.59-92

「哲学的認識論はいつから科学オンチになったのか？」『科学哲学』第30号
（日本科学哲学会編 1997） pp.29-42

「デカルトとイギリス経験論」『デカルト読本』（湯川佳一郎、小林道夫 編著
法政大学出版局 1998）印刷中

The Modern Concept of Man and Hume on Personal Identity', in *The Papers for
the 24th Hume Conference : at Monterey, California, July 29-August 2,
1997*, pp.39-43